

東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報 14

馬場川遺跡 III

1 9 7 5

東大阪市教育委員会

はじめに

生駒山麓の扇状地上に立地する馬場川遺跡は、畿内では数少ない縄文時代後期～晩期の集落跡として重要な遺跡であると考えられてきた。

本市では昭和44年、45年度の2カ年にわたって国庫補助事業として発掘調査をおこない南北250m、東西300mに及ぶ大規模な遺跡であることを確認した。ところが、最近周辺の宅地開発が激しくなり、馬場川遺跡の範囲内にも及ぶところとなってきた。本年度、宅地開発が予定されている土地について、幸いにも国庫補助事業として発掘調査を実施することができた。

本年度の調査で多くの重要な遺物・遺構を確認することができ、馬場川遺跡の性格、規模などが次第に判明しつつある。馬場川遺跡の範囲は75000m²と広く、大部分が未調査であるため宅地開発などから保存することが急務であろう。

調査の実施にあたってはご協力いただいた関係機関、学生諸氏及び土地所有者の方々のご好意に感謝いたします。

東大阪市教育委員会
教育長 小林 俊一

目 次

はじめに	1
1. 調査に至る経過	3
2. 位置と環境	4
3. 調査の概要	5
4. 出土遺物	8
5. まとめ	16
図 版	

例 言

1. 本書は、東大阪市教育委員会が、昭和49年度国庫補助事業（総額 1,000,000円、国庫50%、府費25%）として計画し、文化財課が担当し実施した、馬場川遺跡の緊急発掘調査事業の概要報告書である。
2. 調査は、昭和49年8月5日より開始し、同月の27日まで現場作業をおこない、その後整理作業をおこなった。調査の実施にあたっては、東大阪市遺跡保護調査会の協力を受けた他、土地所有者の中岸恵治、出口芳典氏の援助をうけた。記して感謝の意を表します。
3. 本書の作成にあたっては、遺物の写真撮影を上野利明氏に依頼したほか、縄文土器については中村友博氏の教示をうることができた。記して感謝します。

1. 調査に至る経過

馬場川遺跡は、昭和44年、45年に東大阪市教育委員会の主体で発掘調査が実施された。昭和44年の調査では、縄文時代晩期に属する竪穴式住居跡、炉跡4、埋め壇などともに甚大な量に上る土器、石器などが発見された。特に土偶は、20以上に及び、縄文時代遺跡として貴重な存在であることが知られるようになった。^①昭和45年には、範囲確認調査を東大阪市教育委員会の主体で実施され、南北250m、東西約300mを越える広大な面積を占めることが明らかになったとともに、時期も縄文時代中期末～晩期初頭にまたがる大規模な集落であることがあきらかになった。^②

今年度、東大阪市横小路町434番地で中岸恵治氏が、工場の一部を取り壊して居宅を新築する計画がある旨連絡があった。東大阪市教育委員会では、この土地が遺跡の中央部にあたるため発掘調査の必要があると判断し、大阪府教育委員会と連絡をとるとともに緊急調査を申請した。幸いにも、国庫及び府費による埋蔵文化財包蔵地緊急調査補助金の交付を受けることができ、昭和49年度事業として実施した。また、横小路町744番地の出口芳興氏の所有地においても居宅の新築計画の届出があったので、あわせて試掘調査も実施した。

発掘調査は、昭和49年8月5日より、同8月27日まで延25日間にわたって実施した。調査の実施にあたっては、土地所有者の中岸恵治氏、出口芳興氏には調査することを心よく同意された他、なにかと御援助をうけた。また、東大阪市遺跡保護調査会の全面的な協力及び多数の学生諸氏の参加を得ることができた。記して感謝します。^③

- 1) 東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報4「馬場川遺跡Ⅰ」1970
- 2) 東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報6「馬場川遺跡Ⅱ」1971.3
- 3) 福永信雄、芋本隆裕、勝田邦夫、
- 4) 才原金弘、松田順一郎、飯塚典正、井田和太、内田和男、高山正久、名越栄子、杉本直三。



第1図 昭和44年度、炉跡

2. 位置と環境

馬場川遺跡は、東大阪市横小路町3丁目～4丁目に所在する縄文～古墳時代を通じての複合遺跡であり、特に縄文時代集落跡として周知された遺跡である。

遺跡は、生駒山地のふもとにあり、鳴川谷、横小路谷の谷川によって形成された扇状地末端、標高18～25mに位置している。現在は、馬場川遺跡の北を大門川が東から西へかなりの傾斜をもって流れ、南を同じく其後川が東から西へ流れ、扇状地の裾にそって南から北へ流れる恩智川にそそいでいるが、これらの川によって囲まれた約75000m²が馬場川遺跡の範囲と考えられる。これらの川は、古代においては常に流路を変えて複合扇状地を形成したものと考えられ、また馬場川遺跡の西より河内平野にかけては、縄文時代においては海水が浸入し、湾を形成していたと考えられており、馬場川遺跡は、扇状地の末端の水辺に位置していた集落跡と考えられる。

馬場川遺跡の立地する生駒山の西山ろく地域は、遺跡、古墳が数多く確認されており、特に縄文遺跡の分

- | | |
|----------|------------|
| 1. 馬場川遺跡 | 7. 鬼虎川遺跡 |
| 2. 縄手遺跡 | 8. 西ノ辻遺跡 |
| 3. 日下遺跡 | 9. 岩滝山遺跡 |
| 4. 芝ヶ丘遺跡 | 10. 客坊山古墳群 |
| 5. 鬼塚遺跡 | 11. 山畑古墳群 |
| 6. 植附遺跡 | |



第2図 馬場川遺跡周辺図

布が府下でもっとも密なところである。

東大阪市内では、縄文時代の遺跡としてもっとも早く出現するのが馬場川遺跡の北約1kmに位置する縄手遺跡^②(中～晩期)であり、約10軒の後期竪穴式住居が発見されている。後期に入ると大東市に近いところに日下貝塚(後期～晩期)^③が始まり、さらに晩期には、前期弥生式土器と晩期縄文式土器が共存することで有名な鬼塚遺跡^④が北2.5kmではじまる他、最近、鬼塚遺跡の近くの芝ヶ丘遺跡でも晩期の縄文式土器が発見されている。これらの遺跡は、すべて扇状地末端部、標高20m前後に位置するところに特色がある。

弥生時代に入っても、この地域には多くの遺跡が認められる。鬼塚では縄文時代に引き続き人々が住み、中期に入ると植附遺跡^⑤、西ノ辻遺跡^⑦が始まり、後期ではこれらに加えて芝ヶ丘遺跡、鬼塚遺跡、縄手遺跡、馬場川遺跡が始まる。馬場川遺跡の北東1km、標高100mの地に高地性集落の岩滝山遺跡^⑧が出現するのもこの時期である。

古墳時代に入っても馬場川遺跡、縄手遺跡のように扇状地上には弥生時代後期に引き続いて集落を営むものが多い他、後期には、山畑古墳群を代表とするような小規模な横穴式石室を有する群集墳がみられる。^⑨

このように、扇状地上は、平野部の河川の氾濫に常に悩まされる状態とは異なり、比較的安定した場所であつたらしく、馬場川遺跡においてもその傾向がみられる。

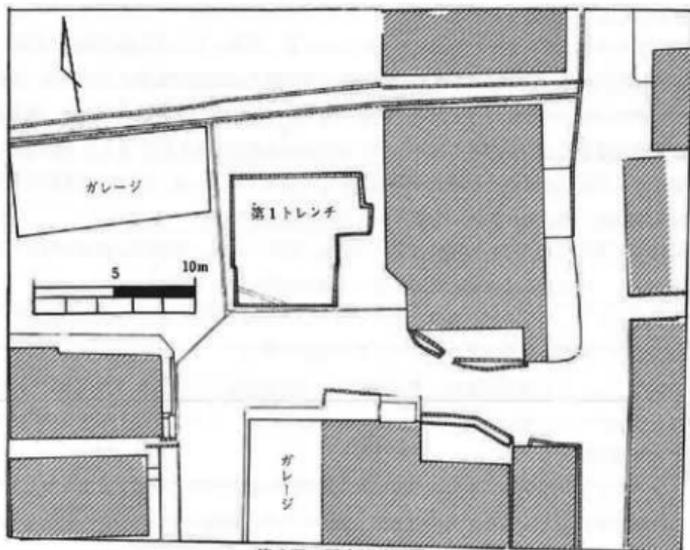
- 1) 梶山彦太郎、市原実「大阪平野むかしむかし」国土と教育18号
- 2) 東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報9「縄手遺跡I」1971、10
- 3) 藤井直正、都出比呂志「原始、古代の枚岡」1967
- 4) 3)に同じ
- 5) 3)に同じ
- 6) 3)に同じ
- 7) 3)に同じ
- 8) 藤井直正、北野保「東大阪市岩滝山遺跡の調査」1971、3
- 9) 東大阪市教育委員会「山畑古墳群I」1973、3

3. 調査の概要

第1トレンチ

調査は、まず横小路町434番地の中岸恵治氏の新築予定地について実施することにした。予定地が約100m²と狭いうえ、周囲に家が建てこんでいるため、予定地の北半分にあたる約60m²について実施し、完了したのち残りの部分について調査を実施することにした。調査地は、最近まで木造家屋が建っていたため、コンクリートの基礎などが残っているためこれらとともに盛土をも除去した。

盛土を除去し、第3層褐色土を掘り下げ、精査したところ南北方向に規則正しく走る3本の溝を確認した。溝は、巾約30cm、深さ約20cmで、ほぼ2.5m間隔にならんでいた。このこ



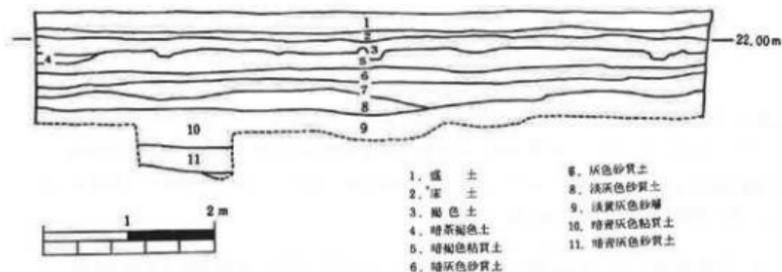
第3図 調査地位置図

とから、耕作のウネのための溝と考えられる。さらに第4層暗茶褐色土を掘り下げると厚さ約30cmの第5層暗褐色粘質土に至る。第5層中には、弥生時代後期の土器が散在した状態で認められた。弥生式土器は、調査地の全城にわたって認められ、特にトレンチ南側（拡張部）では長頸壺、高杯などがほぼ完形な状態で出土した。土器の出土状態は、何ら遺構を伴ったものではなく、包含層上面での完形の土器出土例が多いところから流れ込みによる堆積と考えられ、遺構は南へ続くと思われる。

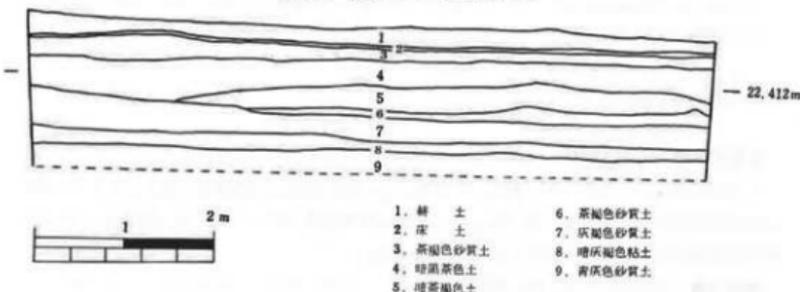
井戸遺構、第1トレンチ北西角で素掘りの井戸遺構を1カ所検出している。井戸は、上面で直径約1m、下方では、0.5mを呈し、深さ約0.8mで井戸内より弥生時代後期に属する土器片を検出しているので、ほぼこの時期に比定できる。

弥生時代の包含層を除去するとすぐ直下より、縄文土器を含む包含層が続いている。包含層は、第6層暗灰色砂質土、第7層、第8層淡灰色砂質土と続き、さらに第9層淡黄灰色砂層、第10層暗青灰色粘質土、第11層暗青灰色砂質土と続いている。

第6層中からは動物形土偶（第12図-11）、土偶（第12図-14）が出土し、第7層直上から土偶（第12図-15）が出土している。土製の玉類もほとんどが6、7層中よりの出土である。7層直上で、トレンチ北端の位置でサヌカイト製のフレークの一群が検出された。完成品の石鏃は、3～4点にすぎずほとんどが割り面をもつフレークであった。フレーク群は、南西約2m、東西0.5mに広がり、散在した状態であり堆積も非常に薄いものであった。石器等の製作跡とも考えられたので、精査したが何らの遺構も認められなかった。



第4図 第1トレンチ北壁断面図



第5図 第2トレンチ西壁断面図

第9層直上が、昭和45年度S地点で発見している土壌墓の遺構面と考えられ(O.P.21.2m)精査したが、何らの遺構も認められなかった。第9層中には若干の縄文土器の細片を発見したが詳細は不明である。第10層、第11層は粘土層と砂層が互層になって続いており流れ込みの堆積状態をしめすものと思われる。第10層中、北壁断面近くより、シカ、イノシシの骨を検出しており、伴出遺物として、宮滝式の特徴をもつ後期末～晩期初頭の土器が出土しているのが注目される。

第2トレンチ

第1トレンチの南約10mの地点で現在は、水田として利用されている土地であるが、住宅建築の計画があるので予定地を試掘調査として実施するため、水田の中央に東西2m、南北10mのトレンチを設定した。

当該地は、昭和42年の工場建設に際し、多くの縄文土器が出土したA地点のすぐ南にあたるため、十分に遺跡が続くことが予想された。

調査は、まず第1層耕土、第2層床土をとりのぞき、第3層厚さ約20cmの茶褐色砂質土、さらに第4層厚さ約30cmの暗黒茶褐色土、第5層暗茶褐色土へと続いている。第3層中には若干の弥生式土器片が認められ、第4層、第5層は弥生式土器を含む包含層である。弥生式土器は、大部分が弥生時代後期に属する畿内第5様式の土器であった。弥生式土器の出土状態

が散一的であったのでさらに掘り下げ、第6層茶褐色砂質土直上、第7層灰褐色砂層質土において遺構の検出につとめたが、遺構は認められなかった。①

この結果、さらに縄文時代の層まで掘り下げることにし、第8層、第9層、暗灰色砂層、第10層暗灰褐色粘土層、第11層青灰褐色砂質粘土層まで掘り下げたが、土器の細片を数点検出したにとどまった。トレンチ内の掘り下げは、約1.8mの深さで、他のトレンチと比較しても縄文時代の包含層まで達する深さであると判断するとともに、湧水が激しくこれ以上の掘り下げは困難であるために打ち切った。

1) 試掘調査終了後、最近になって宅地造成がおこなわれ、立会った結果、弥生式土器が大量に出土したため、緊急調査を実施した。その結果、井戸遺構が2基発見された。これに関する報告は後日を期したいと思う。

4. 出土遺物

弥生式土器

弥生式土器は、第4層、第5層内より出土した。出土状態は、散在的であるがトレンチ南の拡張部からは、長頸壺形土器(6-22、23)高杯形土器(7-29)が一括出土しており、馬場川遺跡の弥生式土器の特色をなすものである。

壺形土器(第6図1-8、21、図版四-4)

壺形土器は(21)を除きほとんど破片である。口頸部を短く直立させたのちになだらかに外反する口縁部をもつものと(1、2、4)口頸部からそのまま外反する口縁部をもつものがある。口縁部端面をわずかにつくり、そこに竹管文(2)、凹線文を一条配したもの(1、3、6)がある。(21)は、ほぼ完形品で器高16cm、口縁部径11cmを計り、球形の器体から短く外反する口縁部をもつ、内外面ともナデによる調整がおこなわれており、内面の粘土紐の接合部には指痕を残す。

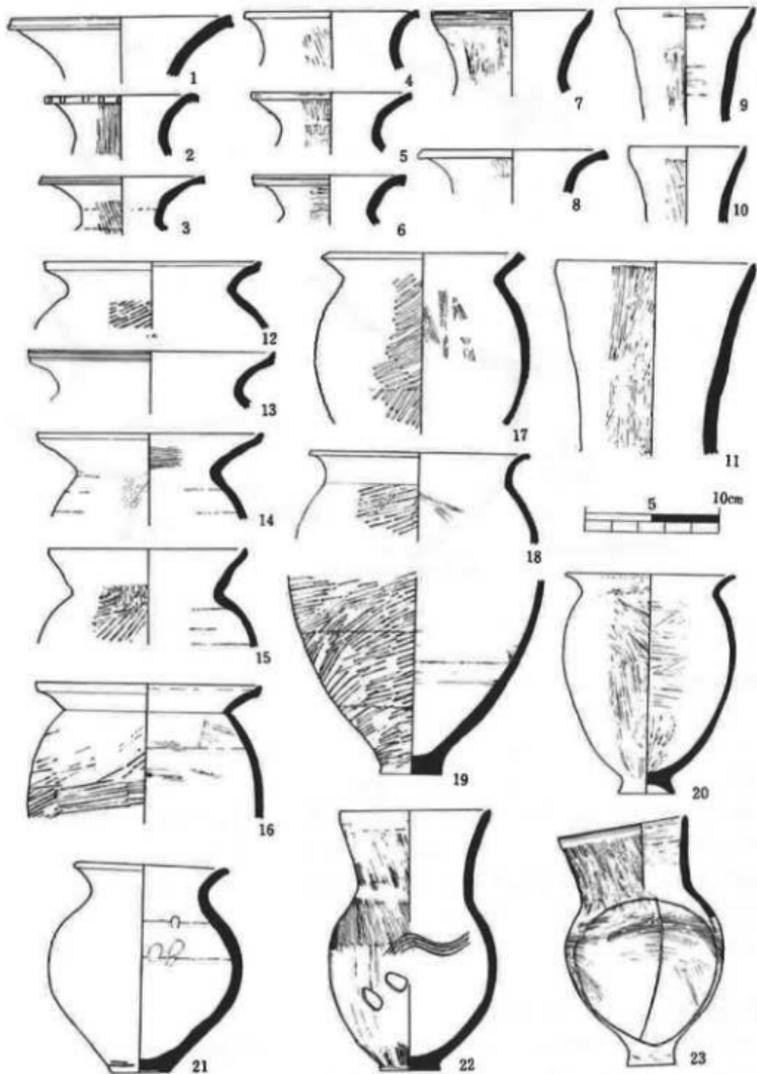
長頸壺形土器(第6図9-11、22、23、図版四-5、6)

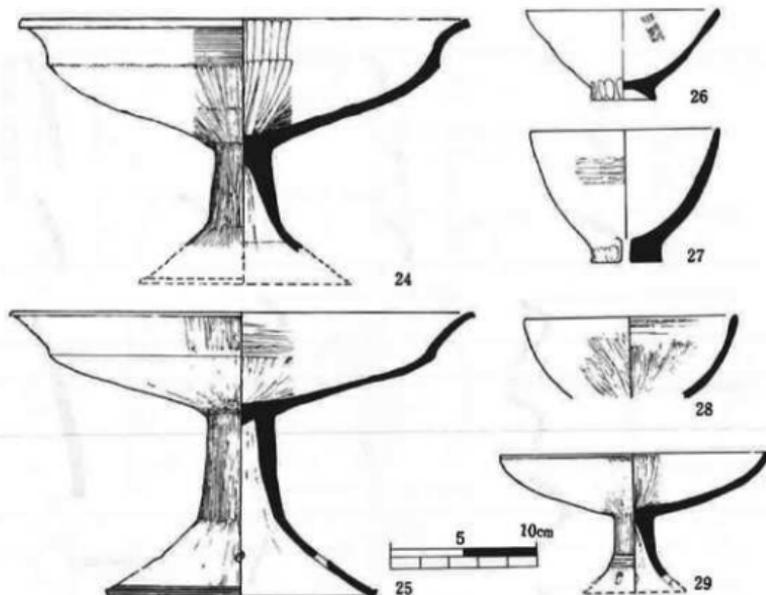
(23)は、口縁径9.6cm、器高18.4cmを計る。球形の器体にわずかに外反ぎみの円筒形の口頸部をつけ、口縁端をわずかに内傾させており直口である。内外面ともハケ目で調整をおこなっている。器体の半分全面をつかってヘラ描きによる円形状の文様をつける。

(22)は、口縁径11cm、器高20cmを計る、細長い器体にわずかに外反する口頸部をつけ、口縁端はわずかに内傾しており直口である。外面の器体上面はハケにより調整をおこない、外面下と内面はナデにより調整している。器体の下面に孔を2カ所あけているほか、器体中央にはヘラ描きによる波状の沈線を4条配している。

甕形土器(第6図12-20、図版四-3)

口縁端部をつまみあげて端面をつくるもの(12、13、14、15、16)とそうでないものがある。(20)は口径12.6cm、器高16.8cmをはかる。他の甕が叩き目手法で仕上げているのに





第7図 弥生式土器

比して、これはハケ目により仕上げている。内面は、ヨコのヘラ磨きが認められ、突出した底部をもつ。

高杯形土器（第7図24、25、28、29、図版五-1、2、図版四-1）

ほぼ完形なものが3点出土している。

(29)は口径18cm、高さ約9.6cmを計る。浅い碗状の杯に比較的低い脚部をつけたもので、内外面ともよく磨かれており、脚部には3条の沈線を入れ円孔をあけている。

(24)は口径30.4cm、高さ約18.4cmを計る大型の高杯であり、屈曲して外反する口縁部をもつ杯部に裾のひろがる脚部をもつ。内外面ともヘラ磨きにより仕上げている。

(25)も口径31.4cm、器高19.8cmを計る大型高杯の完形品であり、脚部に円孔をあける。

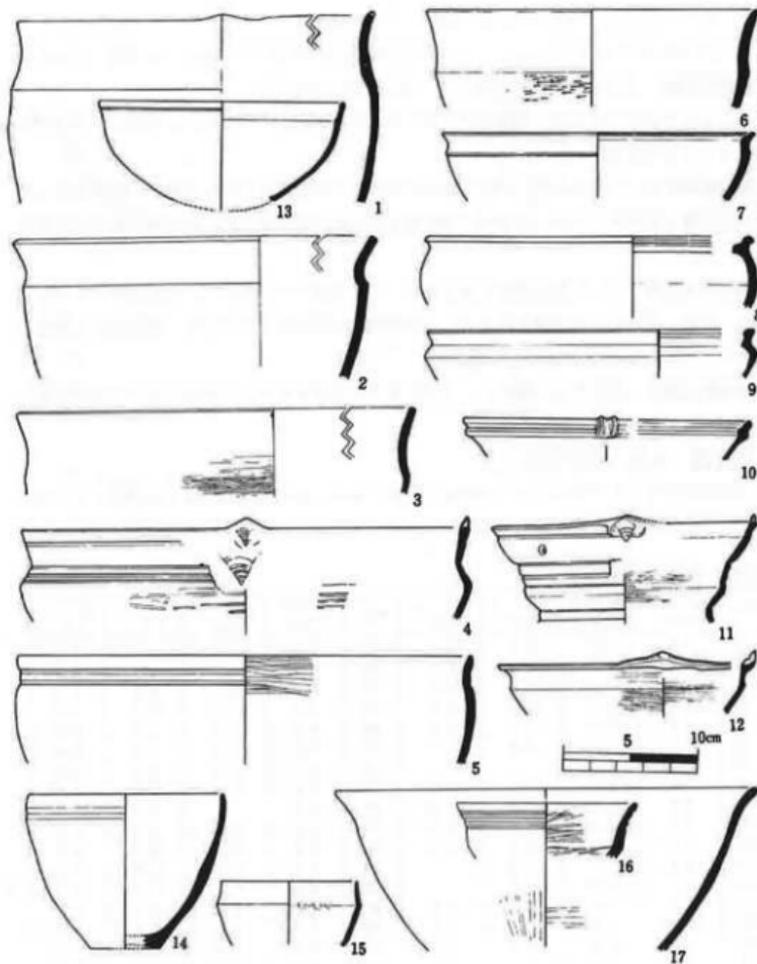
鉢形土器（第7図26、27、図版四-2）

(26)は小型の直口の鉢であり上げ底である。(27)は底部に円孔を明け、こしきとして利用している。

縄文土器（第8図1-17、図版六、七）

縄文土器は、すべて破片であり、第6-11層内よりコンテナ箱に10杯ほど出土した。この中で深鉢形土器、浅鉢形の器形のわかるものについて分類した。

深鉢形土器 破片のみで全体の器形は不明である。深鉢形土器は口縁部と体部との接合部に稜をもち、内外面ともナデにより調整するのを特色とする。(3)、(4)は口縁部及び段上部に



巻貝により沈線文をほどこしている。(4)は三条の沈線を入れたのち、巻貝による圧痕をつけており、体部は巻貝調整で仕上げている。後期の宮滝式の終末時期に比定されるものであろう。

浅鉢形土器 (第8図7-17、図版六1-9、図版七10、11)

ほとんどが破片であるが一部復原できるものがある。量的には少ない。器形から3形態にわけることができる。

浅鉢形土器A 口縁部が短く外反し丸底であることを特色とする。(13)は口縁外面に一条の平行沈線文を配するほか、口縁部に突出部をもつものがある(12)。内外面とも丹念に磨かれている。

浅鉢形土器B (11)は黒色磨研土器であり、口縁部を短かく外反し、突出部をつくる。口縁部、体部に巻貝による沈線をほどこし、口縁部には円孔をあけている。内外面とも丹念に磨かれている。

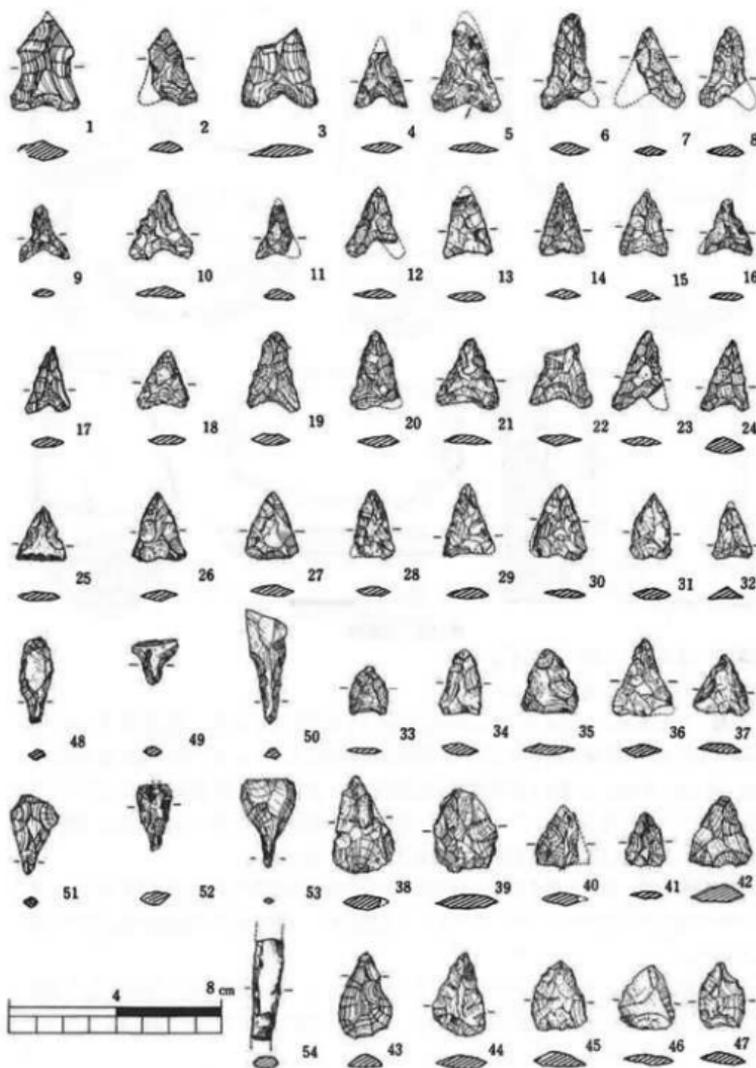
浅鉢形土器C 直口する口縁部と、上げ底ぎみの底部をもつ、口縁部に2条の沈線を配し内外面ともナデにより調整している。

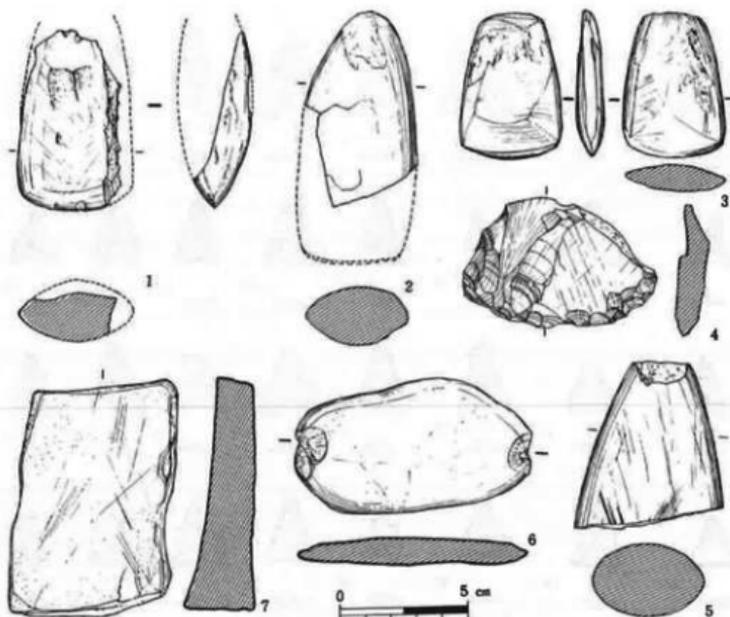
石器類 (第10、11図・図版八)

石斧は5点出土しており、すべて磨製である。(3)は、長さ2.9cm、重さ42.2gでよく磨かれている。(7)は砂岩質の砥石である。

第9図 石鏃・石鏃一覧表

NO.	現存長 (cm)	最大巾 (cm)	厚み (cm)	重さ (g)	NO.	現存長 (cm)	最大巾 (cm)	厚み (cm)	重さ (g)
1	3.8	2.6	5.5	3.9	28	2.6	3.0		1.2
2	2.8		4.0	1.7	29	2.8		4.5	1.8
3			5.0	2.7	30	2.8	2.1	3.0	1.4
4	2.7	2.1	3.0	1.0	31	2.4	1.5	3.5	1.2
5	3.4	2.6	2.5	2.2	32	2.1	1.5	4.0	0.8
6	3.7		4.0		33	1.8	1.4	2.0	0.6
7		2.6			34	2.4	1.5	4.0	1.3
8	3.1		3.0	1.3	35	2.4	1.9	1.3	1.6
9	2.2	1.9	2.5	0.56	36	3.0		4.5	2.3
10	2.6	2.4	3.5	1.5	37	2.2	2.1	4.0	1.8
11	2.15		2.5	0.6	38	3.8	2.4	6.0	4.1
12	2.8		3.0		39	3.0	2.0	5.0	4.0
13		1.8	4.0		40	2.3		5.5	1.5
14	2.7	1.6	4.0	1.1	41	2.1	1.5	2.5	0.9
15	2.35	1.7	4.0	1.3	42	2.7	2.3	6.2	2.9
16	2.2	1.8	3.5	1.2	43	3.2	2.0	4.5	2.3
17	2.55	1.8	3.0	1.0	44	3.1	2.1	5.0	2.7
18	2.15	1.9	4.0	1.5	45	2.7	2.0	4.5	2.3
19	3.15	1.9	5	1.9	46	2.5	2.0	3.5	1.8
20	2.6		4.0	1.5	47	2.4	1.4	5.0	2.0
21		2.25	4.0	1.6	48		0.5	0.3	2.1
22	3.05	2.3	3		49		0.6	0.4	
23	2.8		4.6		50	4.4	0.8	0.4	4.4
24	2.0	1.75	3.5	1.5	51	3.1	0.6	0.4	2.1
25	2.02	1.8	3.5	1.05	52	2.5	0.7	0.3	1.1
26	2.6	2.0	3.5	1.4	53	3.3	0.6	0.4	3.3
27	2.6	2.0	3.5	1.4	54	3.8	1.1	0.4	





第11図 石器類

土製品 (第12図1-18、図版七1-16)

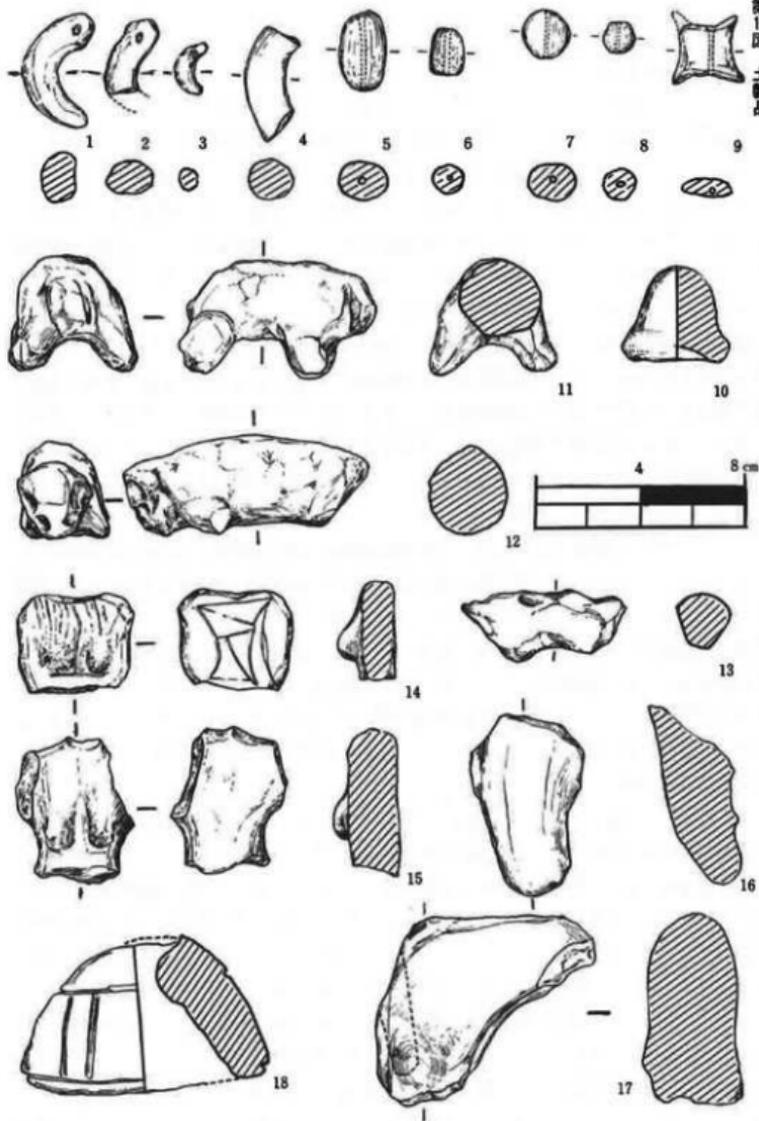
多種多様のものが出土している。

1. 玉類 勾玉4点、土玉4点、米まき状土製品1点が出土している。(1)は長さ4.4cm、重さ18-gを計り比較的丁寧に仕上げられており、円孔は両端からあけている。(7)、(8)は丸玉で、径1.8cm、6.1g、1.2cm、1.9gを計り両端から穿孔している。(5)、(6)は土鍾になるかもしれないが一応ここで取り扱うことにした。(9)は、米まき状土製品と呼んでいるが節具の一種であると思われる、長さ2.6cm、5.4gを計り、両端から穿孔している。

2. 動物形土偶 計5点出土しているが形のわかるものは3点である。(11)は長さ7.6cm、高さ4.4cmで尾の方を破損している。イノシシかと思われる。(12)は長さ9.2cmで足はすべて破損している。

3. 土偶 5点出土しているが形のわかるのは4点である。(14)、(15)はともに胸のあたりだけ残存しているが、(14)は背中も線描により描写している。(16)は足の部分、(17)は左手から左胸にかけての部分である。

4. 半球状土製品 径9.4cm、高さ約5.4cmをはかる。外面にはへら描きによる格子状の文様を描き、内面は丁寧にナデている。昭和44年の調査で完形のもので出土しているが、用途は不明である。(18)



5 ま と め

馬場川遺跡の範囲 今年度の調査地点は、馬場川遺跡のほぼ中央部分より北よりの地域と考えられるが、現在までの調査成果から馬場川遺跡の範囲を考えてみたい。

昭和45年度の調査において、北は大門川の南付近まで、西は国道170号線近くまで及びことが明らかになった。最近、横小路町1157番地で住宅建築に際して、試掘調査をおこなったところ、上層に布留式に比定できる土師器の包含層をもち下層に晩期の縄文土器を含む包含層が続くことが確認された。また、横小路744番地での住宅建築に際しての試掘では縄文時代の包含層は確認されていない。この結果、やはり其後川の北岸までが南限であり、さらに東へ生駒山麓の扇状地上に広がる可能性がある。

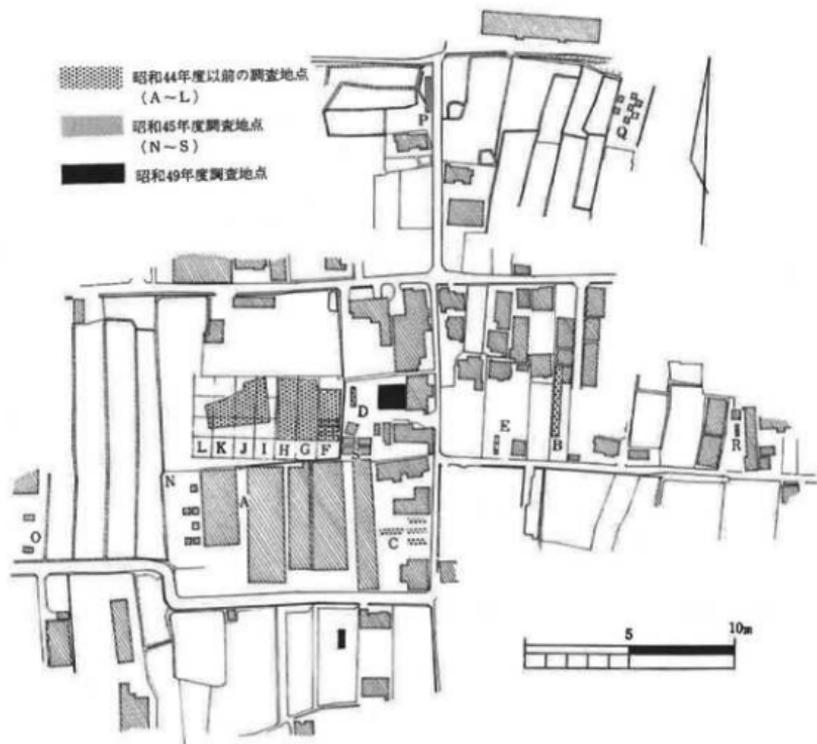
馬場川遺跡の時期 今回の調査で出土した縄文土器は、従来の宮滝式の特徴をもつものが大部分を占めることによりほぼ後期末～晩期初頭に比定できるものである。馬場川遺跡の縄文集落は、昭和44、45年の調査成果からも地点ごとに、その時期差があらわれているようである。つまり、最西端のO地点では、中期後半の土器が検出されており、少し東のN地点では後期初頭の中津式に比定する土器が出土している。遺跡の中心部と考えられるF～L地点ではいわゆる滋賀里式の土器が多く発見されている。

また、今回の調査地点に近いS地点では今回の調査と同じく後期末の宮滝式の特徴をもつ土器が出土している。さらに東の範囲は、現在までのところほとんど未調査であるが、E地点、B地点は、いずれもが晩期の滋賀里式の土器が出土している。このことより、馬場川遺跡は、晩期初頭の一時期にはかなりの集落であったと考えられるが、それ以前つまり中期後半には西端の方に、後期初頭には少し東の地点、後期末にはさらに東の今回の調査地点に移り住み、晩期初頭には今回の調査地点の南及び東へかけての一带に住んだものと考えられる。

弥生時代の馬場川遺跡は今回の調査においても弥生式土器の包含状態が著しく、弥生時代の集落跡として明らかになりつつある。

弥生時代の包含層は、今回の調査地点を含めて、S、F～L、N、A地点で検出しているところから縄文の範囲のほぼ中央部に重複していると考えられる。弥生の包含層と縄文の包含層の間層はほとんどなく、弥生の包含層が縄文の包含層を切っている状態が認められる。遺構としては、現在までのところ井戸遺構が今年度の1トレンチ、2トレンチ、溝状遺構が昭和44年のCトレンチから発見されているだけであるが、今後住居跡なども発見される可能性がある。時期は、今回の出土土器も西ノ辻N地点の特色をもったものが若干検出されているほか、2トレンチの最近の調査では弥生後期末から庄内期の土器が出土している。このことから後期初頭から後期末までの一時的な集落跡と考えられよう。

このように馬場川遺跡は、単に縄文時代の集落跡というだけでなく、複雑な扇状地上に立地しているため、上層には弥生時代、古墳時代の包含層が重複している。このことは、各時期を通じて居住地としての条件がそなわっていたためであろう。今後、調査面積が増えるに



第13図 トレンチ付近図

したがって各々の時代の性格、規模などが明らかになっていくことが期待される。



調査以前の状況



弥生時代の井戸遺構



シカの骨、縄文土器出土状況



弥生式土器出土状況



土偶出土状況



フレイク群の状況

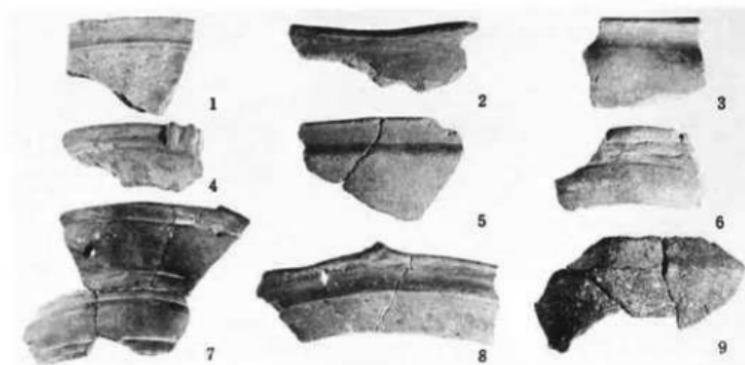
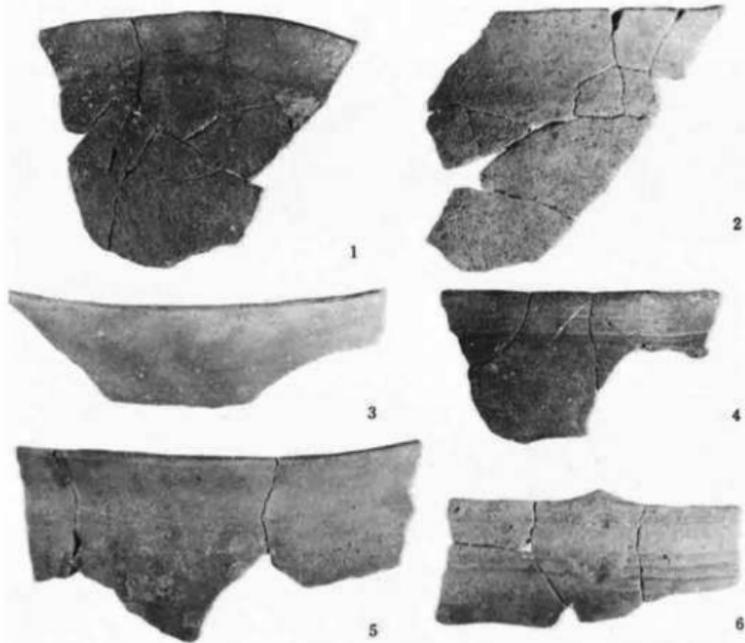


動物形土痕出土状況



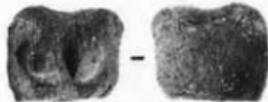
圖版五 弥生式土器(1/3)







10



11



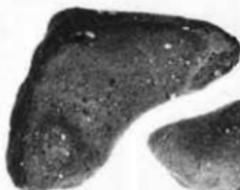
12



13



14



15



16



10



11

